日本仏教心理学会

ニュースレター

Vol.12. 2014年11月1日

目　次

巻頭語

映画上映企画という体験　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　葛西　賢太

特集

学術大会･ シンポジウム参加報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

千石　真理

１．　第１７回　日本内観医学会奈良大会

２．　シンポジウム　死とより良く向き合うために

３．　日本「祈りと救いとこころ」学会創立記念大会

松村　一生

１．　日本トランスパーソナル学会　創立２０周年記念大会

お知らせ ・・・・・・ GRACE プログラム　2015　ターミナルケアでの燃え尽き防止のために

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　千石　真理　・　松村　一生

巻頭語

映画上映企画という体験

宗教情報センター／上智大学　　グリーフケア研究所

葛西　賢太

11 月に、米国サンディエゴで行われた、アメリカ宗教学会（American Academy of　Religion）に参加した。学会では仏教研究やマインドフルネスやチャプレン制度に関係あるパネルに参加したが、そのほか、『精神』（想田和弘監督）という映画の上映企画もお手伝いした。その話を皆さんにお聴きいただきたい。

映画は、岡山の小さな精神科クリニックのドキュメンタリーである。この映画、音楽もナレーションもない。監督はこれを「観察映画」という。監督自身が観察したものを、観客が再度観察する。そして監督と同じではないけれども重なる体験をする。患者さんの顔にはモザイクがかかっていない。患者さん個々にきちんと承諾を得て、一人の人間としてきちんと描く／描かれたい、という意思表明だ。この監督は、ほかにも、ある自民党市議選に密着した『選挙』『選挙 2』、平田オリザの仕事を追った『演劇 1』『演劇 2』などの仕事がある。

この映画からは、患者さんの抱える諸事情や、障害者の自立支援保護法などの社会的趨勢が何を患者さんにもたらしたかが伝わってくる。感動したりスッキリしたり、ではなく、「これどうするんだよ」「なんかできないの」という重い感じが残る。その一方で、患者さんの表情のさまざまな変化も読み取れ、「病苦」や「精神病」というひとことに片付けられない密度を持った体験に触れることができる。モザイクをかけていたら、この変化は見えないだろう。「病気の人」という以上に、患者さんのことが見えなくなってしまうのは、もったいない。

クリニックには、待合室のような集会所のような場所「こらーる」が併設されていて、またレストランや牛乳配達などの支援事業も行っている。映画撮影の打診があったとき、院長は患者たちに打診するように提案し、監督は患者さん一人ひとりに個別に交渉する。患者さん一人ひとりの人生ということを考えれば、自然なことだ。監督の話によると、親御さんからの強い抗議もあったりして映画制作を諦めかけたが、2 割ぐらいの患者さんが承諾してくだ

さって、撮影ができたという。念のために補足しておくと、これは患者さんの病気につけ込んで承諾を取りつけたなどというものではない。登場する患者さんは、精神の障害や病に振り回されながらも、検討し判断し、一人の人間として登場することを選び取っているのが、わかる。岡山での上映会には、患者や医療スタッフを含め多くの方が集まり、日本全国で強い反響を呼びながら上映された。

アメリカ宗教学会に戻る。映画には英文字幕がついていて、ほぼ日本語と同じタイミングで笑ったりびっくりしたり怒ったりすることができる。ほんのちょっとの差で、いろいろな背景をもつ人々と、一緒に涙したり笑ったりするのは、味わい深い体験である。一人でみるよりも皆でみる方が、まず、何倍も楽しめる。私も、長いつきあいの先輩や友達と、なんども感想を語り合った。患者さんたちのきまじめさや信じているものに触れて、感動したり、引っかかりを覚えたり、ときにはいらだったりした。それらすべてを共有できる映画だった。

上映するだけでなく、今回は、日本におけるＨＩＶ患者たちの生き方について研究している医療人類学者と、吉本内観についての研究のある日本宗教研究者が感想をコメントし、監督がそれに応え、会場からも熱心な質問があった。

この準備、監督や米国内外のなかまとのやりとり、実に楽しかった。当日は参加された方々とともに作品を楽しむことができた。それで、ひとつ提案。仏教心理学会でも、映像セッションを設けてはどうか。全員参加枠ではなく、個人報告と同時進行で、一室だけ映像作品を行う部会をおき、仏教と心理学に示唆する作品を鑑賞する選択肢も用意するのだ。映画が大好きな僧侶ふたりの対談、秋田光彦・釈徹宗『仏教シネマ』という本があるが、映画を通して仏教心理を学ぶ、というのは、楽しく、人と人とをつなぎそうだ。

特　集

学術大会･ シンポジウム参加報告

秋季から冬季にかけて、各地では様々な分野の学会、シンポジウム、勉強会等が開催されています。日本仏教心理学会ニュースレター編集者が参加した、当学会に関連のある学術大会、シンポジウムの報告をさせていただきます。

レポーター　**千石真理**

心身めざめ内観センター主宰

1. 第１７回　日本内観医学会奈良大会

大会テーマ

「内観療法の新たな可能性を探る」

会期：平成２６年１０月１８日（土曜日）

会場：奈良女子大学佐保会館

大会長：真栄城　輝明　奈良女子大教授

プログラム

一般演題（４題）

内観療法による「ドメステイック・バイオレンス加害者臨床」
　茅野分　他（銀座泰明クリニック精神・神経科）

発達生涯をもつ外来患者への内観ワークプログラム導入の試み
　宮崎博美　他（長崎大学病院　精神神経科）

内観療法における心理的変容のプロセス―愛着スタイルを中心に―
　森松彩香　他　（成増厚生病院　東京アルコール医療総合センター）

内観者にとっての「合掌」「お辞儀」「屏風」の持つ意義
　蘆立群　他　（奈良女子大学人間文化研究科・大和内観研修所）

体験発表

　奈良鹿子　（ＤＶ被害者の立場から）

ランチョンセミナー・特別対談

「内観療法の可能性を探る―これまでの内観、これからの内観」
　対談者：竹元隆洋　（日本内観学会元理事長・指宿竹元病院会長）
　　長山恵一　（日本内観学会理事長・法政大学教授）

総会

シンポジウムＡ

「内観療法の国際化にあったて直面する諸問題をどう乗り越えるか」

中国における内観療法の展開　王祖承　（上海交通大学医学院教授）

韓国における内観療法の展開　李大云　（韓国内観研修所所長）

多文化間精神医学の立場から　小澤寛樹　（長崎大学病院精神神経科学教授）

ハワイ内観の立場から　千石真理　（心身めざめ内観センター主宰）

シンポジウムＢ

「内観療法の新たな可能性を探る」

森田療法との併用　路英智　（山東省市淄博市精神衛生中心教授）

内観面接で夢を聴くことの意義　森下文　（学校心理士）

日常内観の実践から　栗本藤基　（滋賀里病院院長）

指定発言：日本文化から生まれた心理療法としての内観への提言
秋田　巌（京都文教大学教授）

記念対談

「谷川俊太郎の世界に耳をすませば」

話し手：　谷川俊太郎（詩人）

聞き手：　真栄城　輝明　（臨床心理士）

懇親会

レポーター感想

浄土真宗僧侶、吉本伊信によって開発された内観療法が、医療の現場で、そして　海外で実践され臨床、研究が広がっていく様を感じ、内観治療をライフワークにしている臨床家として、非常に嬉しく思いました。特に、中国、韓国からの先生方のご発表を拝聴し、内観に出会われた個人体験を伺うと、内観の普遍性を感じると共に、人間の魂に触れる内観の奥深さ

を改めてかみしめました。レポーターも、今後、ハワイでの内観研修を再開する予定ですが、益々内観を普及させたいという思いを新たにさせられました。懇親会は、中国、韓国からの内観指導者や、イギリスからの研修者も多数参加され、国際色豊かな、楽しい交流の場となりました。谷川俊太郎氏の作詞にまつわるエピソードも、大変興味深く拝聴させていただきました。谷川氏は、「鉄腕アトム」の作詞や、日本レコード大賞作詞賞に輝いた「月火水木金土日の歌」「マザー・グースのうた」の翻訳でも著名です。対談相手の、「どうしたらそんな言葉が出てくるのですか？」の問いに、「心を空っぽにしたら、自然と言葉が降ってくる。」と答えられたのが深く印象に残りました。

２．　シンポジウム　死とより良く向き合うために
－伝統的知恵をターミナルケアに活かす

日時：2014 年 11 月 1 日（土曜日）

会場：武蔵野大学武蔵野キャンパスグリーンホール

共催：日本トランスパーソナル心理学/精神医学会、武蔵野大学仏教文化研究所、
武蔵野大学看護学部、日本仏教心理学会

Part 1　死に関わる医療現場の現状と課題

高齢期日本の医療現場の抱える課題　　大井玄　（東京大学名誉教授）

20 年に渡る在宅ケアの臨床現場から　　内藤いづみ　（ふじ内科クリニック院長）

Part 2　日本におけるスピリチュアル・ケアの展望

超高齢化社会日本におけるスピリチュアル・ケアの展望

島薗進

（東京大学名誉教授、上智大学グリーフケア研究所所長）

ケア提供者にとって『自分を見つめること』はなぜ必要か

小西達也　（武蔵野大学教授）

Part 3 現代社会における伝統的知恵の可能性

現代社会における仏教のスピクトラム : Upaya Institute と Mind and Life Institute が切り開いたもの

永澤　哲　（文教大学準教授）

レポーター感想

高齢期日本の医療現場の抱える課題を発表された大井玄先生は、特に老人の胃ろう手術の選択について取り上げられ、人間としての尊厳について聴衆に問題定義されました。内藤いづみ先生は、これまで見送られた患者さんと、ご家族の様子を生き生きと語りながら、在宅ケアの現状と問題点を、教えて下さいました。島薗進先生は、被災地での僧侶の活動にも触れながら、震災後、日本人が死生観と祈りを取り戻しつつある。弔いは宗教を超えて取り組むべき、と結んで下さいました。小西達也先生は、アメリカ、国内でのチャプレンとしての経験からスピリチュアルケアを提供する側の心得、セルフケアに関してひも解いて下さいました。　永澤哲先生は、現代において、仏教の世俗化とは、科学との対話であると分析され、脳科学の立場から、特に瞑想の有効性について発表されました。スピリチュアルケアの重要性に関しては、欧米に比べかなり認識が遅れている日本ですが、臨床仏教師や、臨床宗教師の養成講座も始まり、徐々に関心がもたれるようになってきました。欧米のようにスピリチュアルケアが浸透するのは、まだ先かもしれませんが、先生方のお話を聴かせていただき、この分野の研究と実践が、確実に光の指す方向へと向かっていることを喜ばずにはいられませんでした。

日本「祈りと救いとこころ」学会創立記念大会

大会テーマ

「無望の時代を生きる～新しい絆を求めて～」

会期：2014 年 11 月 8 日（土曜日）

会場：ホテルメトロポリタン　曙の間

大会長：島薗進　　東京大学名誉教授、上智大学グリーフケア研究所所長

プログラム

基調講演

「精神医療の先・・・祈りと救いのこころへ」　榎本　稔　（榎本クリニック）

大会長講演

「死と悲しみと希望―日本の宗教文化に即して」

島薗　進　（上智大学グリーフケア研究所）

シンポジウムⅠ

「無望の時代を生きる」

「無望の時代を生きる」　古市　憲寿　（社会学者）

「懺悔、感謝、祈り―未来に備えるために」　千石　真理（心身めざめ内観センター）

「他者を信じられない病―信頼障害としての依存症」小林　桜児

（神奈川県立医療センターせりがや病院）

シンポジウムⅡ

「現代社会の祈り・救い・こころを考える～宗教は答えを出せるのか？～」

「喪の作業の不全をいかに克服するか」　加藤　敏（自治医科大学）

「現代社会の祈り・救い・こころを考える」　西山　悦子　（上智大学）

「現代社会の祈り・救い・こころを考える」　宇野　全智（曹洞宗総合研究センター）

懇親会

レポーター感想

「祈りと救いとこころ」学会は、「祈りと救いとこころ」の活動に関わる医療・福祉・心理・司法・教育・社会学などを専門とする人々の自己啓発と連携を促進し、宗教と精神医療の臨床、教育、研究、調査を促進し、その進歩、発展、普及に貢献することを目的として設立されました。今大会テーマで使用されている「無望」は造語ですが、未来に対して希望の持てなくなった現代において、「祈りと救い」の心は、失われた絆を再構築するために、最も必要なものではないでしょうか。

レポーターは、シンポジウムⅠのシンポジストとして「あたりまえから有難い」へとものの見方を変えることによって、絆、つながり感を取り戻すための実践法として、本邦で開発された内観療法と、ハワイのヒーリング法、ホ・オポノポノの有効性について発表させていただきました。シンポジストとしてご一緒させていただいた、社会学者の古市憲寿先生は、現代の若者の生態を鋭く分析され、昔と違い、人生に多くを望まない現代の若者の幸福感が実は決して低くないという現状を、様々なデータを用い、解りやすく説明して下さいました。同じくシンポジスト、依存症の専門医である精神科医、小林桜児先生は、特

に危険ドラッグに依存する人々の周辺事情にも触れ、患者に関わる医療者の御苦労について、お話して下さいました。その他、医療の現場におけるスピリチュアルケアの実践体験、宗教者が苦悩する人々にどのように寄り添い、支援できるのかなど、先生方の御講演を拝聴しつつ、安心して仏教や、スピリチュアリズムについて語れる学会が、また一つ誕生したという事実に、心より感謝いたしました。

シンポジウムＩの模様

向かって左から小林先生、千石、古市先生、座長の張賢徳先生（帝京大学教授）

☺☆☺

レポーター　**松村一生**

一般社団法人　日本産業カウンセラー協会

産業カウンセラー養成講座実技指導者・シニア産業カウンセラー

1.　日本トランスパーソナル学会　創立２０周年記念　第１１回学会大会

大会テーマ

「スピリチュアリティの原点」

会期：平成２６年９月１３日（土曜日）、１４日（日曜日）

会場：明治大学駿河台校舎

会長、大会委員長：諸富　祥彦　明治大学教授

プログラム

一般演題（講演ほか）

オープニングトーク「２つの異なる次元？健康とスピリチュアリティ」
　諸富　祥彦　（明治大学）

ワークショップ「トランスパーソナル&ホリスティック
～神秘主義的心理療法の実践」
　富士見　ユキオ（認定プロセスワーカー、臨床心理士）
　岸田　千雅子（アーニー&エイミー・ミンデル認定セカンドトレーニング教師、臨床心理士）

シェアリング「スピリチュアリティの原点」
　松村　憲（認定プロセスワーカー、臨床心理士）
　椿　里誉、辰巳　裕介、笠置　浩史（学会常任理事）

映画上映「バイロン・ケイティ・ワークの実際」
　ティム・マクリーン、高岡よし子（有限会社　シープラスエフ研究所）

講演「森になる」
　河野　秀海（一般社団法人　森になる　代表理事、浄土宗僧侶）
　橋爪　謙一郎（株式会社　ジーエスアイ　代表取締役）

講演「彼方のコトバ、コトバの彼方―スピリチュアリティの始原」
対談「若松英輔さんとスピリチュアリティの原点を探る」
　講演　若松　英輔（批評家、「三田文学」編集長）
　対談　鏡リュウジ（心理占星術研究家、平安女学院大学客員教授）

講演「ダンマ（真理）に至る道を求めて
～修験道・アマゾンシャーマニズム・上座部仏教の修行体験から～」
　石川　勇一（相模女子大学人間社会学部教授、臨床心理士）

分科会験発表

「＜日本＞という問いを瞑想する」

甲田　烈（相模女子大学）

「ほんとうの自分、魂の記憶を紐解く、ヒプノセラピー入門講座」
似鳥　陽子（ライトクルー　カウンセラー）

「被虐者へのスピリチュアル的な支援の模索」
黒崎　碧（ＺＥＲＯ総合戦略研究所）

「物語り（ナラティブ）に隠された私
―よしもとばなな『キッチン』作品解釈をめぐって」
荒木　奈美（札幌大学）

「笑いヨガとトランスパーソナル（スピリチュアル）」
山崎　厚志（笑顔・つながり研究会）

「新しい人生を創造する（エンプティチェアを活用して）」
成田　幸子（ＣＲＥＡＴＩＶＥ　ＳＰＡＣＥ）

総会

レポーター感想

当学会とも、会員の（若干）重なる日本トランスパーソナル学会は、今年創立２０周年を迎えました。今２０周年記念大会は、会長の諸富祥彦教授によれば「原点回帰」ともいうべき、会員の会員による会員のための大会となったように感じました。

仏教会との関係性で言えば、「森になる」代表の河野秀海師による取り組み、森を作り、最後はそこに埋葬してもらおうという運動とそれを推進する「トンレン」と呼ばれるチベット仏教起源の瞑想。大乗仏教・タオイズムとの親和性の高いアーノルド・ミンデルが考案したプロセスワークをデモンストレーションした富士見ユキオ（藤見幸雄）氏。修験道・シャーマニズム・上座部仏教の修行を通じて、悟りの世界の一端をご報告いただいた石川勇一教授などが、たいへん興味深く、拝聴することはできました。

お知らせ

GRACE プログラム　2015

~ターミナルケアでの燃え尽き防止のために～

日時：2015 年 4 月 24（金）午後１時～26 日（日）午後４時

会場：長弓寺　（奈良県生駒市）

講師：ジョアン・ファリファックス師

シンダ・ラシュトン教授

トニーバック教授

参加費：　会員　65,000 円、一般　70,000 円（宿泊費・食費込み）

募集定員　50 名

参考資料：「Being with Dying: Cultivating Compassion and Fearlessness in the Process of Death」by Joan Halifax (2015 年 1 月春秋社より刊行予定)

詳細は、ホームページ(http://bwdj.org)をご参照下さい。

編　集　後　記

ついこの間、除夜の鐘をついたと思ったら、もう師走に入り、2014 年も終わろうとしています。会員の皆様にとって、今年はどんな年だったでしょうか。年末、慌ただしく過ごされておられる方も多いかもしれません。忙しさに追われると、目先のことをこなすのに精いっぱいで、日常の幸福を当たり前だと思ってしまいがちですが、こんな時ほど、瞑想や内観などの自己反省を、しっかりと行い、感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

私事で、ニュースレターの発行が、通常よりも非常に遅れてしまったこと、深くお詫び申し上げます。今後とも、ご交誼、ご指導、どうぞ宜しくお願いします。

会員の皆様、おひとり、おひとりにとって、充実した年末年始をお迎えられることを、心より念じております。

千石　真理

カウンセリングなどに関わっていると、時にクライエントの深い深い領域への旅に、立ち会う機会があります。このような時には、何かの「ご縁」があってこのような機会に立ち会わせていただけている「袖ふり合うも他生の縁」と、とてもありがたく思えるものです。

スピリチュアルとは、宗教から宗教性を除いたもの、という定義もあるようですが、上記のような時には、ＷＨＯが１９９９年に提唱した「健康」の定義にもあるように、その人を全人的に理解し受け止めようとするなら、バイオ（有機体）サイコ（心理）ソーシャル（社会的）だけでは充分ではなく、スピリチュアルなレベルでお話をお聴きすることの大切さをつくづく感じます。

松村　一生